

安徽省懷寧県は中国中部のありふれた街だ。農業や軽工業が中心の経済は北京や上海に遠く及ばないが、貧困地区でもない。1921年結党の中国共産党で初代総書記に就いた陳独秀の故郷である以外には、中国国内でも話題にのぼることが少ない。

「このアンケートに答えてもらえますか」。中国人民大学で国際政治を研究する趙衛濤・助理研究員(31)は2015年8月、妻の故郷の懷寧に1カ月滞在し、知人のいる職場や学校を回った。対日感情に関する実地調査を行ったためだ。

確かに把握することは日中の関係の難題の一つ。中国では体制批判に転じかねないため、世論調査自体がほとんどない。数少ない調査も大都市を対象で、13億人の中国人全体を代表しているとは言いがたい。

日中の国民感情に関心を持つ趙氏は「ごく普通の街である懷寧は草の根の対日感情を知るのにいい場所だ」とアンケートを思いつき、362人から有効回答を得た。近くは「経済が発達して論文にまとめる本人の許可を得て、その一部を分析してみた。」

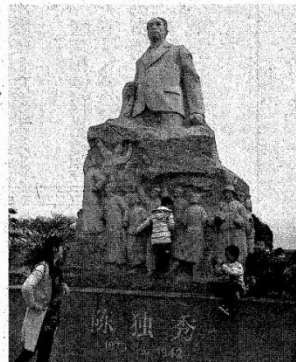
「日本の第一印象は」の問いでは「比較的重要」と「非常に重要」が合計で5割を占めた。一方「日本製品のボイコットをどう見るか」は「意味がある」が36%を占めたが、「意義は大きくない」「理性的でなく誤り」が合わせて5割を超えた。歴史問題で厳しい回答が目立つものの、日本答には日本への好意が入ったところもある人はゼ

「日本製品のボイコットをどう見るか」は「意味がある」が36%を占めたが、「意義は大きくない」「理性的でなく誤り」が合わせて5割を超えた。歴史問題で厳しい回答が目立つものの、日本答には日本への好意が入ったところもある人はゼ

行ったところのある人はゼ口だった。「日本を知る主な手段」の問いでは「歴史の教科書」と「テレビのニュース」の2つの答えが抜けて多かった。懷寧市民の対日感情は「おおむね厳しく、前向きな見方もあるが、基本は間接情報に基づいている」と

「1901年10月に初めて日本に留学し、一生に5回、日本に渡った。独秀公園の石碑には、陳独秀が中国最後の王朝の清朝打倒につながる革命思想に日本で触れたことが刻まれている。日中交流の意義の大きさは懷寧の先達も示している。」

地球回覧



陳独秀は日本で革命思想に触れた(安徽省懷寧県の独秀公園)

中国草の根の対日感情は

の良きや重要性を否定し、り交じっているが、「日今春のある週末、懷寧の中心部にある「独秀公園」を訪れた。実は趙氏のアンケートでも、362人のうち日陳独秀の石像の回りでは本人と接触した経験があるのは50人足らず。5人が日本に1、2回行ったことにはあったが、何度にも趙氏と同じ質問をした

ている可能性がある。趙氏は「庶民の関心は生活にあり、中日の政治対立をおおる考え方は少ない。中日に友好の基礎はある」と前向きだ。実際に、急増する日本経験者は日本のサービスの質の高さや街並みの清潔さを知り、そろって日本への好感を高めている。